

検査結果の最大効果を期待する

PRRS や PCV2(サーコ)等のウイルス疾病の動きを把握するのに頻用されている遺伝子検査は、検体をまとめて検査するためまとめて混ぜてしまう傾向があります。コストメリットは高まりますが、本来示したい結果が検出されないという現象も起こるので注意が必要です。

具体的にはある農場の肥育豚 160 日令前後の豚 5 頭ですが、同じ日令だったこともありプール血清で PCR 検査を実施しました。結果は PCV2 で 7,079 個のウイルスが確認されました。その後、5 頭それぞれの血清を検査してみたところ、4 頭が 0、1 頭で 113,882 という高い数字が出ました。計算上プールにしても 20,000 個くらいのウイルス遺伝子が確認されても良いのですが、結果は約 3 分の 1 に留まりました。これは陰性血清に含まれる阻害物質や混ぜる操作でウイルスの特徴を有する遺伝子断片が壊れてしまったものと考えられます。これが PRRS のような RNA ウィルスの場合には DNA の影響も受けるのもっと顕著に表れます。特に PRRS で陰性かどうかを慎重に検討していくことが重要になっている更新豚の繰り上げ時の検査、肥育期での感染時期の詳細特定に多少のコストはかかりますがデリケートな結果が求められる際は検体ごとの検査も考慮に入れたらいかがでしょうか。

血清抗体の動きは過去の現象を証明するものですが、現時点でどうかという場合には PCR が的確な結果をもたらします。

- ① 慎重な検査の際はプール血清よりも個々の検査をしよう
- ② 的確な診断を得るためには多くの検査材料を調べよう